

## 「見失われた、いのちのはたらき」

大橋 一成

最近、葬儀の際に火葬場にお骨を拾いに行かない人がみえるということをお聞きしました。「何故こんなことになったんでしょうかねえ？」と尋ねると、「お骨を持ち帰ると、お墓に納骨したり、お墓を建てて納骨しても面倒を見る人もいないし、あるいは分骨をしたりすると、経費が掛かるからじゃないですかねえ。」という返答をいただきました。様々な事情があるとは言え、ここまで合理化が進んでいるのかと愕然としました。

私たちは、どうかすると自分ひとりの力で大きくなり、自分の努力によって大人になったような思いがありますが、誰もが不可思議な縁の中で親から生まれ、全く無力な私をここまで育てあげてくれました。ですから、今の自分は親があつての自分であるはずなのに、独りで大きくなったつもりでいるから、先祖から脈々と受け継がれているいのちのつながりが見失われてしまっているのではないのでしょうか。その結果の一つとして、お骨を拾いに行かなくなったようにも思います。

私たち真宗門徒にとっての本尊は、阿弥陀如来というはたらきをもって表現されており、親鸞聖人は、その阿弥陀如来のはたらきを「無量寿」と顕されました。「無量寿」とは、人間の知恵ではとても考え出すことのできない、計りしれないいのちのはたらきを、私たち人間に呼び覚まさせる教えとして示され、世の中のあらゆる生き物（いのち）が支え合い、つながり合っているという厳然たる事実を真摯に引き受けようというメッセージが送られていることを強く感じたことであります。